

〔報告と展望〕 第2回ワークショップ（国文学研究資料館共催）を終えて

中原中也記念館館長・中原豊氏をお迎えし、2022年12月22日に下記の構成でワークショップ（オンライン）を開催した。年末にもかかわらず、41名、日本を含む5カ国からの申し込みを頂いたことに、まず感謝したい。

・第一部（基調講演）中原豊氏「中原中也記念館の収蔵資料とその公開——国文学研究資料館との協同——」

・第二部（懇談）グループセッション「資料をめぐる文学館・図書館と文学研究の協同」

第一部の詳細については、中原豊氏によるご寄稿（本誌掲載）を、ぜひご参照いただきたい。ここでは、第二部と開催後アンケートの内容を中心に報告し、あわせて若干の展望を示したい。

第二部では自己紹介から始まる懇話を目指し、2つのテーマ——（1）文学館・図書館等資料の研究利用と活用の方法、（2）研究成果の文学館・図書館等における活用方法——をゆるやかに共有しつつ、5～6名ごとのグループトークルームを設けた。またグループトーク終了後に、各室での話題につき、報告・共有を行った。以下、そこで展開されたおもな話題を紹介する。

■ デジタルアーカイブ化をめぐる先進的な取り組み例とデジタル化の功罪

- ・「Derrida's Margins」（プリンストン大学、<https://derridas-margins.princeton.edu/>）における、書き込みを含む旧蔵書のデジタル化と画像公開。
- ・デジタルアーカイブによる資料の保護と継承、アクセシビリティの向上。
- ・データベース構築により、資料の来歴が分かるようになる。資料の持つドラマに触れられる。
- ・自筆資料のデジタル化により、作品の成立過程の解明が進む。
- ・デジタル化の推進に伴い、廃棄される紙資料の問題。
- ・特定の作家や資料群だけが取りあげられることへの危惧。作家間、資料間でのデジタル化推進格差の拡大。それに伴う研究インフラの格差。

- ・所蔵資料群の一部をデジタル化することに伴う問題。デジタルアーカイブが一人歩きしてしまうことへの危惧。資料の認知と正確な知識の提供に向けた、企業・資料館等の協力協同の必要性。
- ・資料のデジタル化に伴う原資料の閲覧休止の問題。
- ・近現代資料の公開可否をめぐる判断。著作権をはじめとする法律以外に必要とされる配慮。資料に関わる人すべての「対話」の重要性。

■デジタル化作業・規格・技術

- ・資料公開をめぐる制度設計。プラットフォームの整備と運営。
- ・撮影環境や条件のあり方。その不統一状況。
- ・デジタル資料と原資料間での色調等の差異の把握や補正
- ・デジタル化の仕様をめぐる不統一。それに関連する一部情報の欠落（カバー画像。書店シールや価格情報。貼り込み・挟み込み。サイズ。アンカット。ドッグイア。ウォーターマーク。その他。）

■文学館の取り組みと館員の業務

- ・全国文学館協議会の役割。HPによる情報の提供・共有。資料公開状況の不透明性の解消その他への期待。
- ・デジタル資料、とくに公開データの不適切利用への対策。
- ・デジタル化と公開に必要な費用ならびにマンパワー。予算獲得と館員の負担増加をめぐる問題。
- ・文学館／図書館業務の多様性と、館員に求められる専門性。
- ・展示等イベントと研究成果の接続

■文学（館／研究）のこれから

- ・文学と社会との接続
 - ・新規受容の掘り起こし
 - ・学芸員・図書館員・研究者による、学術成果を含む情報の発信と相互共有。
 - ・閲覧不可／非公開資料の死蔵や埋没回避と、(研究)活用のための(学術的)認知の形成。所蔵情報と公開状況についての発信。
 - ・散逸資料、目録未掲載資料等の問題。存在の把握。情報の整理と共有。
- 続いて、開催後に実施したアンケートより、本誌での紹介に同意された方の

回答の一部を紹介したい。

■利用（訪問）したことのある文学館・図書館・資料館等の取り組みのうち印象に残っているものを教えてください。

〈コロナで多くの図書館が休館する中、大宅壮一文庫が、有償サービスである「Web OYA-bunko 会員版」を無料で利用できるようにされたことが印象に残っています。館の取り組みやサービスを、多くの方が知るきっかけにもなったのではないかと思います。〉

〈神奈川近代文学館が特に充実している印象。国文研のデジタルアーカイブはぜひ全国の文学館に拡大してもらいたい。〉

〈日本近代文学館の夏の見学会。学部生の頃に書庫や原稿を見せていただいたことで蔵書研究にも興味を持った。〉

〈田山花袋記念館。生誕 150 年記念特別展。文学館が学会（花袋研究学会）等と連携して事業を進めていくことに意義を感じています。〉

■「文学館、図書館との協同可能性と人文学のこれから」に関連し、やってみたいことはありますか。文学館、図書館、資料館や、人文学研究の未来のために、どのようなことが必要だと考えますか。

〈資料の公開などに関する悪い（？）イメージを払拭する。資料破棄ではなく資料保存の手段としてデジタル化を考える。写真公開できない資料は TEI 形式のデータなどでの公開を考える。また、作成したデータを研究業績にカウントできるよう評価する。公開したデータ・画像に永続的リンクを付ける。〉

〈教育現場との関わりをさらに強めることが必要だと感じる。文学館見学が社会科見学のように国語科の重要なカリキュラムのひとつとなれば、将来的に人文学への関心を高めることに繋がるのではないか。〉

〈神奈川近代文学館では以前 Wikipedia の編集イベントがあり参加していないが関心を持った。手始めとして、貸室などしている文学館で、学会の大会や例会を行なってはどうか。〉

〈全国の文学館、図書館、個人で所蔵されている作家資料の所在がわかるようなデータベースがあると、資料保全・研究活用の双方に役立つのではと考えました。〉

〈多様な立場の人（資料の関係者、文学館・図書館員、文学・社会学・情報学などの研究者）が自由に意見を交換できる場が必要だと思います。〉

なお、文学館を会場とする学会開催の試みは、昭和文学会春季大会（於神奈川近代文学館、2024年6月8日）をはじめ、昨今少なからず計画されている。これにより、文学館と研究者、文学資料と研究の新たな接点が生じつつある。

連携や協業としては、やはり『文豪とアルケミスト』や『文豪ストレイドッグス』とのコラボレーション企画に対し、賛否両論を含めた関心が少なからず向けられているようだ。アンケートでは、批判的な意見として、既存受容者を文学（館）から遠ざける可能性への懸念につながる回答も見られた。その他、キャラクターの一人歩きや、作家間格差といった、デジタル化に伴う課題と同種の課題も浮上している。教育現場に身を置く立場から付言すれば、文アルや文ストの普及が、研究対象の選択動向に多少の影響を及ぼしていることや、作家と作家間ネットワークへの関心がある程度高めていることは観取しやすい。最近の企画を例に取るなら、神奈川近代文学館による井伏鱒二没後30年展と文アルとのタイアップは、ゲームの世界観に踏み込みつつ、文化資源としての文学資料の活用に新路を開く、表層にとどまらない連携を実現したものとして評価できるだろう。文学研究においても、日本近代文学会が2018年度秋季大会特集企画「アダプトされた文学の可能性——平準化する人文知の受容現象を問う——」で、『文豪とアルケミスト』のプロデューサー谷口晃平氏を講演者として招きシンポジウムを開催したことをはじめ、若年層の取り込みはもとより、文化資源の活用可能性や、文学と社会の連結装置としての役割への期待を、それらに見出す向きがある。

マルチメディアの普及と文学をめぐるパラダイムシフト。劇的に変化する時代のなかで、私たちは何をどのように守るのか。そしてどのように変わっていくのか。

第2回ワークショップをとおして、自筆資料をデジタル化するメリットと可能性、課題について改めて確認することができた。また、報告者自身の認識・見解を相対化する機会にもなった。近現代領域の資料については、著作権の遵守と存命関係者等への十分な配慮を必要とするものが多い。アクセスの易化が、

資料の不適切使用を発生させるリスクへの対応も、デジタル化によって新たに増えた課題と言える。2025年には、新学習指導要領で国語教育を受けた世代が大学生になる。「ニル、アドミライイ」も「平安朝の下人の Sentimentalisme」も共有できない可能性が、目前に迫っている。文学をめぐる共通の基盤を必ずしも持たない社会となったとき、文学をそこにいかに結び付けていけるのか。文学（資料）を価値あるもの、未来に継承すべきものとして認識させ、かつその認識を社会に根付かせる説得力が求められる。

基調講演で中原豊氏が紹介された佐々木幹郎氏のことは「全集は（特に決定版と銘打つ場合は）、作者が書き残したものをすべて網羅するという建前で編集されるものなのだが、それがかなうことは一〇〇パーセントあり得ない。何年かかっても、何度でも、未来の子どもたちがそのときまでに発見された資料によって、より充実した全集に改訂すればいいのである。そのときのために、全集に必要なのは、現時点での最大限の書誌情報であって、それが過去と未来をつなぎとめる」は、全集と書誌情報以外にもあてはまるだろう。重要なのは、現時点における最大限を保存し、未来に渡すことではないか。文学や文学資料が未来に引き継ぐべき重要な遺産であることを、学術研究とともに、教育と文化振興を通じて、この社会にも届く言葉に変換したい。（渡部麻実）